

し、より深く追求した、という思いを新たにしました。

リッカルド・カショーリ著、アントニオ・ガスパリ著、草皆伸子訳
『環境活動家のウソ八百』(洋泉社、2008年8月発行、760円+税)

—————石橋 佳法

近年、環境問題への関心の高まりからさまざまな場所で“エコ”という言葉が耳にする。しかし、この“エコ”という言葉自体が一人歩きをしてしまっていないだろうか。

本来、環境問題等で使用される“エコ=エコロジー”という言葉は「生態学」または「生態的環境」を指し、多くの人が思い描く“環境にやさしい”という意味は持ち合わせていない。また、現在多くの企業が行っている“エコ事業”と呼ばれるものの中にも、本当に環境にやさしいものであるのかどうか疑問符がつくものもある。企業側のいう“エコ”は環境にやさしい=地球温暖化問題にどう取り組んでいるのかという意味合いが強く、“CO2の排出量を極力抑え、経済的なもの”という意味で使用されている。そして、消費者側も、“エコ”という言葉で“環境にやさしい=温暖化対策”と理解しているようだ。

このような背景には、現在の環境問題の多くが「地球温暖化問題」と関連付けられて報道されているという点にある。地球温暖化問題はさまざまな環境問題の一因ではあるが、それぞれの問題の主因ではない。それぞれの問題の主因を解決していくことが重要なのではないだろうか。

本書は、現在の環境保護運動の根底には、選民思想や途上国の発展抑制論、人口抑制論といった考え方があり、これらの思想に基づいて国際的な環境保護活動が展開されているとしている。また、一部の過激な環境保護活動家や団体による広報活動が現在の環境問題を歪曲させているとして、彼らが訴える地球の現状についての検証も行っている。そして、環境問題を解決

するためには、人間の尊厳を重視するだけでなく、人間を始め地球上に生きる全ての生物の幸福の実現を目標とした方法論を再構築すべきとして、本書がそのためのきっかけとなることを目的としているという。

本書は、以下のような4部構成となっている。

第1部「環境というイデオロギーの名のもとに行われる数々の欺瞞」では、ダーウィンの進化論から派生した選民思想(本書では「優生学」)が急進的なフェミニズムや産児制限(バース・コントロール)運動、環境保護運動とどのように結びついていったのかという思想史的な検証を行っている。

第2部「環境問題の常識に反証する」では、環境問題を考えるうえでよく耳にする環境神話(人口過剰は実際に起こっているのか、持続可能な開発は可能か、予防原則の罨、地球温暖化の影響はあるのか、森林破壊は本当に進んでいるのか、種の消滅はおきているのか、遺伝子組み換え食品は危険なのか、大気汚染は悪化しているのか)についての検証を行っている。

第3部「正しいエコロジーとは何か」では、環境学研究者と環境活動家の違いについてとりあげている。環境学研究者は個々の問題において、さまざまな分野の知識や技術を総動員して解決策を見出すのに対し、環境活動家は問題の解決のための犯人捜しに奔走し、問題の本質を見失っていると指摘する。このような環境活動家の思想の根底には“科学不信”と“自然崇拜”があり、このような思想をさらに推し進めた過激な環境保護団体の活動にはモラルも人間性もなく、環境問題を解決するためには、従来のような方法論ではなく、新たな方法論を再構築す

る必要があるということをキリスト教的立場から論じている。

第4部「環境紳士録」では、グリーンピース、WWF、ワールドウォッチ研究所を例に、環境保護団体が自らの正当性を世間に訴えるために過激な行動や過剰な情報操作を行っていることを指摘し、これらの行動自体が環境問題の真実を覆い隠し、解決すべき課題を悪化させ、さらなる問題をも生み出す危険性を秘めているのではないかとしている。

本書は、環境問題について、従来のような地球温暖化という視点からではなく、人口問題という視点から考察している点が特徴である。その中で、著者らは現在騒がれているような先進国での環境問題の多くはすでに解決済みであり、環境問題の中心はむしろ途上国側にあるという。途上国での環境問題を解決するためには、先進国はさらなる研究・開発を行い、途上国は開発を積極的に行うことで先進国なみの豊かさを手に入れるべきであり、その過程の中で、先進国で開発されたバイオテクノロジーなどを途上国に導入すべきであると主張している。また、途上国の環境問題を考えるうえでは、環境保護団体が流布した歪んだ情報や過激な活動によってさまざまな活動が妨害され、本来救えるはず

の生命までもが失われているとも主張している。

現在、日本では、地球温暖化問題への関心からいわゆる“エコ・ブーム”となっている。しかし、地球温暖化問題を見ても、「CO2 悪玉説」や「温暖化による脅威」という点ばかりがクローズ・アップされ、本来議論されるべき問題が取り上げられず、十分な理解がされていないというのが現状ではないだろうか。このような意味で、本書は従来とは違う視点から環境問題へアプローチし、現在の環境問題のあり方に疑問を投げかけているという点からも、現在の環境問題を再考するきっかけを与えてくれる一冊である。

しかし、本書では生物の多様性に関する議論があまりなされていないなど、内容的に一部疑問が残る部分もあり、他の環境問題を論じた書籍を併読し、さらなる環境問題への理解を深めていただきたい。同時に、現在の“エコ・ブーム”で乱立している“エコ商品”や“エコ・プロジェクト”が本当に環境にやさしいのか、われわれが普段“環境にやさしい”と思っている行動が本当に環境にやさしいのか、もう一度再考してみたい。